

さかきだせいべえ 榊田清兵衛

(1864-1929、大曲生)

幼少期

幼名清蔵、のちの5代目清兵衛は、大曲の豪農、榊田家の長男として誕生した。戊辰戦争の際に榊田家に宿泊した政府軍の隊長桂太郎の影響を受け、活発な幼少期を過ごす。

また、学制発布以前から秋田藩の教師を招いて特別授業を受けるなど、優秀さにおいても群を抜いていた。明治7(1874)年、10歳の時に先代清兵衛が早世し、家督を継いだ。勉学や趣味に没頭している。

政治家として

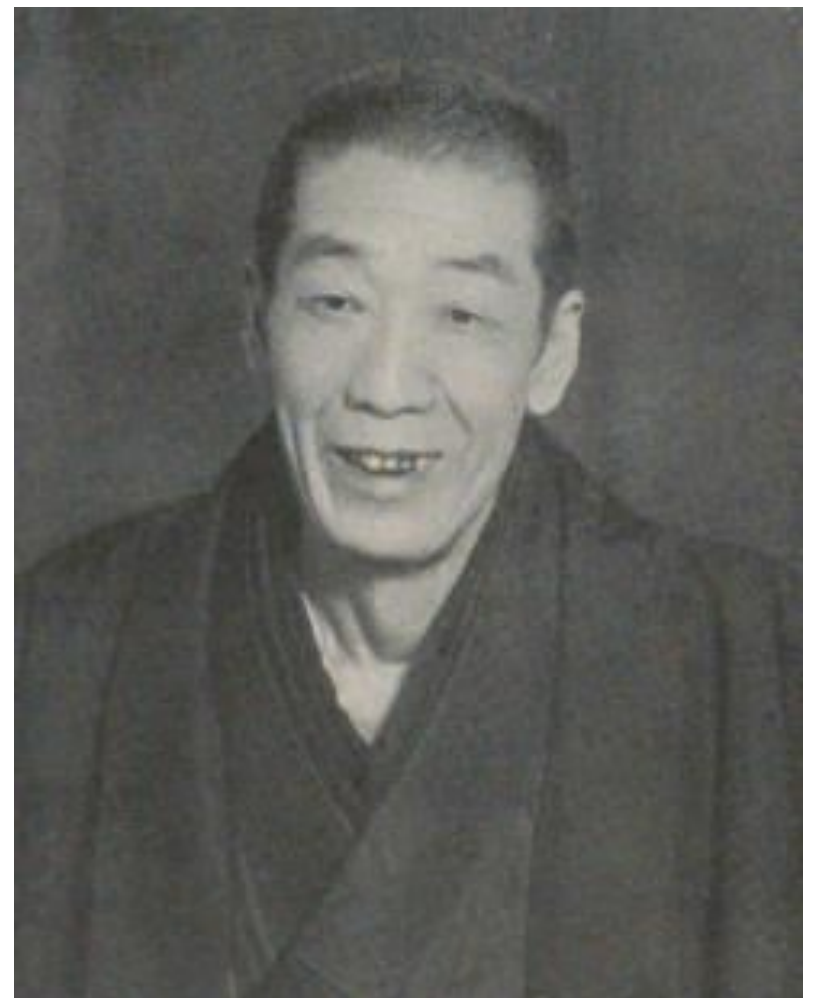
仙北郡会議員として、はじめて政治の世界に足を踏み入れたのは、清兵衛26歳(明治23年)の時である。翌年、県会議員となり県会議長などを勤めた。大曲裁判所移転問題をきっかけに、明治41(1908)年に第10回総選挙において、郡部トップで衆議院議員に初当選すると、そのまま請願委員長に抜擢され、政友会(初当選当時は無所属)で原敬の右腕と謳われるまでになっていく。

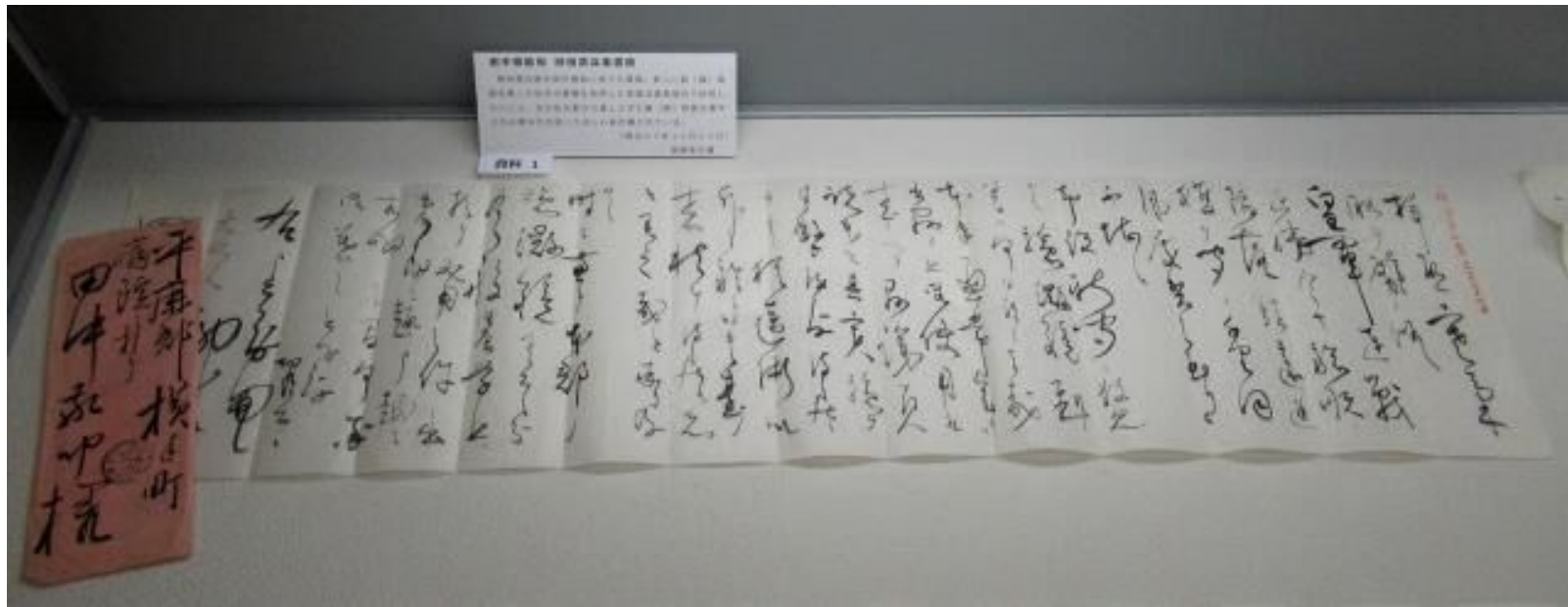
しかし、大正10(1921)年に原敬が東京駅で斃れると、床次竹二郎を首相にするために奔走、それを実現できないまま、昭和4(1929)年10月7日、胃潰瘍を悪化させ65歳の生涯を閉じた。

榊田清兵衛の功績

第一に盛曲線(現在の田沢湖線)の実現に尽力し、戦争を挟んで昭和41(1966)年に全線開通し、現在も大仙市民に利用されている。

さらに、学校や試験場などを誘致し、仙北平野に農業センターをつくるなど、仙北地域の発展に尽力した。



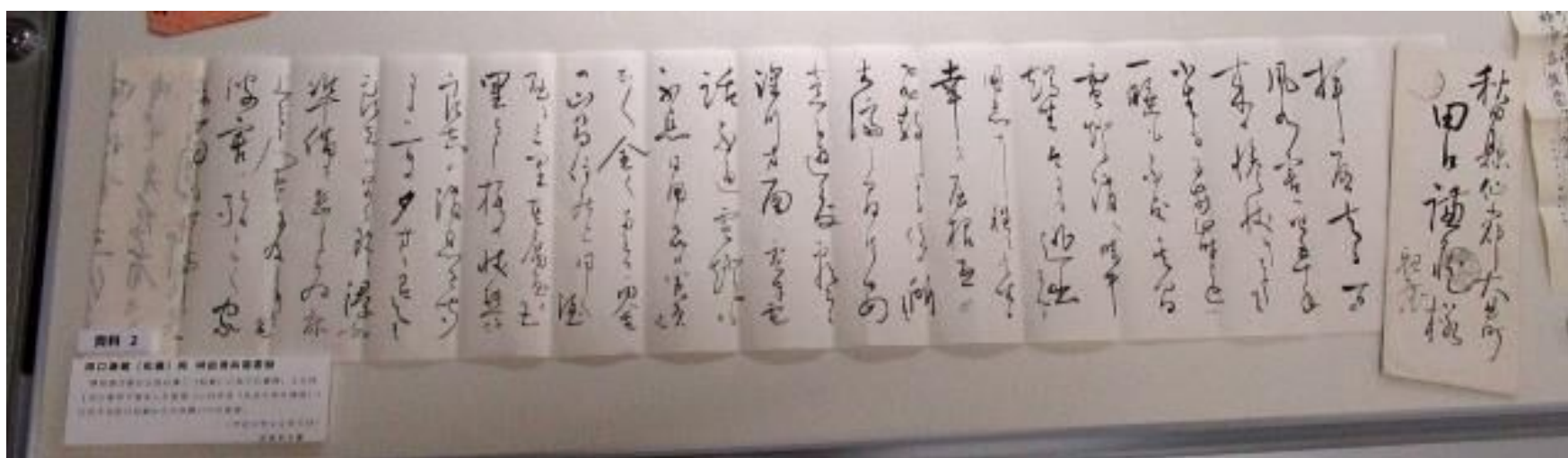


田中敬助宛 榊田清兵衛書簡

田中敬三は湯沢出身のツツガムシ病研究の第一人者。田中の最新の顕微鏡での実験に興味を示す榊田清兵衛からの書簡。(高階家文書)

田中敬助 (湯沢) (1862-1945)

文久2 (1862) 年、医家に生まれた田中は、14歳で父を亡くすと、父の友人を頼って上京した。明治21 (1888) 年に東京帝国大学医学全科を卒業した。帰郷し開業すると、ツツガムシ病の研究に取り組み、内小友の寺村政徳とともに秋田のツツガムシ病の克服に尽力した。



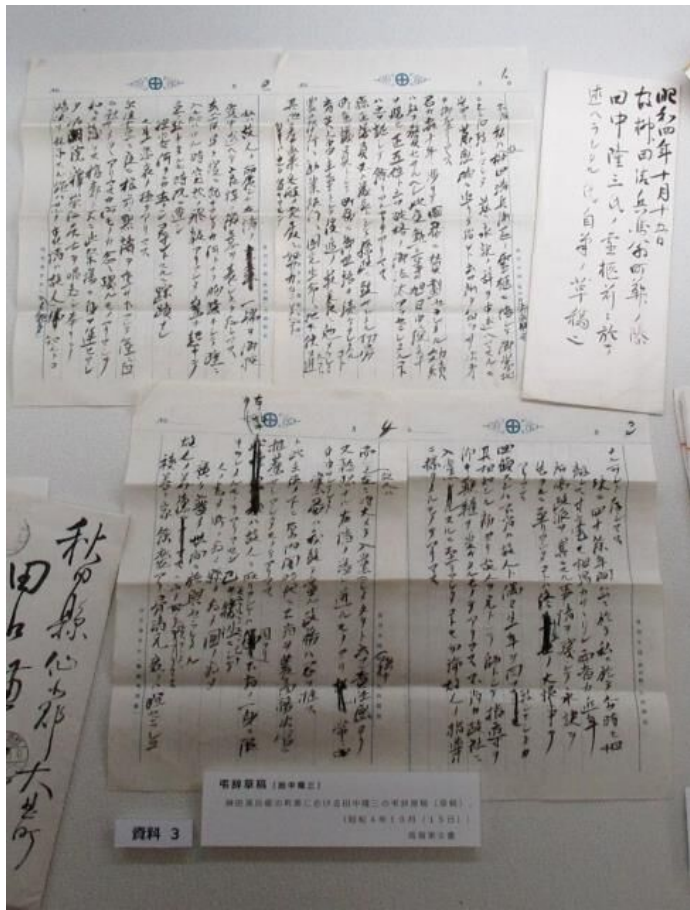
田口謙三 (松園) 宛 榊田清兵衛書簡

仙北新報社長であった田口謙三 (松園) が送った東京で発生した大正6年の大津波 (高潮) への見舞状に対し、被災の状況などをつづった榊田清兵衛の返信。(高階家文書)

田口松園 (大曲) (1883-1951)

本名は謙蔵。秋田中学を卒業後、東京専門学校 (現早稲田大学) で坪内逍遙に学ぶ。帰郷後、仙北新報社長、大曲町長、県会議員などを歴任した。明治から昭和にかけて、政治的にも文化・芸術でも大曲の発展に寄与。





弔辞草稿（田中隆三）

昭和4年に急逝した榊田清兵衛の町葬に際して、政友会・民政党などで政治活動をともしした田中隆三（衆議院議員）が読んだ弔辞の草稿。（高階家文書）

田中隆三（秋田）（1864-1940）

元治元（1864）年、檜山に秋田藩士・田中隆世の長男として生まれる。東京帝国大学法科を卒業し、農商務省へ入省。その後実業界に転じ、秋田鉱山専門学校（現秋田大学国際資源学部）設立に尽力した。明治45（1912）年に衆議院議員に当選すると、濱口内閣・第2次若槻内閣で文部大臣を務めた。



扇

昭和7年に完成した榊田清兵衛翁記念碑の碑銘が印刷された扇。（高階家文書）

榊田清兵衛翁碑銘草稿（内藤湖南）

榊田清兵衛翁記念碑建設に際し、田口謙蔵（松園）が榊田清兵衛の友人である内藤湖南へ碑銘を依頼したことが封筒表書きでわかる。碑銘草稿は内藤湖南の直筆。骨清は清兵衛の号。（高階家文書）

内藤湖南（鹿角）（1866-1934）

本名は虎次郎。慶応2（1866）年、毛馬内村に南部藩士の子として生まれる。秋田県立師範学校を卒業し、10代で主席訓導となる。明治20（1887）年に上京し、「明教雑誌」「日本人」などで記者、編集を歴任。明治42（1909）年に京都帝国大学教授となり、東洋史研究の第一人者となった。



赤川の治水工事

山形県の赤川は、大正以前には最上川に流れており、大雨のたびに氾濫していたため、川幅拡幅による治水工事を実施する計画があった。しかし、拡幅地に田を持つ農家が困っていると聞いた榊田清兵衛は、政府に願い出て、砂丘を掘って新しい川の流れを作る工事に変更した。



赤川左岸荒屋(昭和10年11月)



土砂運搬作業の様子(昭和8年)



酒田河川国道事務所 HP より転載